

## ■ 研究発表論文

# 長野市松代町の城下町絵図に見られる水路システムの特徴

The Characteristics of Watercourses Systems Described in the Old Plans of Castle town Matsushiro

佐々木邦博\* 横矢 美和\* 大矢 貴巳\*  
Kunihiro SASAKI Miwa YOKOYA Takashi OYA

**Abstract :** Matsushiro, castle town build in Edo era (1600-1867), is known by the water courses systems which flow from the pond of garden to garden pond of neighbor in the town. They are called Garden Water Courses. In Matsushiro, there are about 10 plans of this castle town drawn in Edo era. And, on the 4 of them, the watercourses systems are described. This study aims to clear the formation and the characteristics of these watercourses systems and their classification. As a result, on the 4 plans, probably drawn in the 18 century, the water courses are marked in all town area, except one quarter, Tonomachi. And as the town area spread, the number of springs was increased, and the watercourses were extended. In another kind of plan in this era, called Watercourses plan, the watercourses system at Tonomachi is described in detail, included the Garden watercourses. Consequently, the watercourses system became clear throughout Matsushiro. And the classification of watercourses needs to be reconsidered.

**Keywords:** Matsushiro, Watercourses system, castle town plan, garden with pond, Edo era, Nagano prefecture

キーワード：松代、水路システム、城下町絵図、池庭、江戸時代、長野県

## 1. 研究の目的

江戸時代に数多く形成された城下町では、城の周辺に武家町が形成され、屋敷内には庭園が整えられていた。庭園に池が造られる場合も多かった。池の水は屋敷の前の水路から取水し、庭の池まで流れを作り、そして池からまた水路まで水を流している場合が多い。水路の水を使い、水路に返すという一軒ごとのシステムである。しかし、庭の水を水路に返さず、隣の屋敷の庭へ直接流していく水路のシステムを持つ城下町も、数は少ないが存在する。現在この水路システムが残っている城下町として、長野市松代町が知られている。

松代の水路システムは、約 20 年前に長野市の条例により、代官町、馬場町、表柴町の三町が「伝統環境保存区域」に指定された時に、この区域内を中心に調べられている。東京大学の西村幸夫はこの水路システムを分析し、道路を流れるカワ、庭の池から隣の庭の池へと流れる泉水路、屋敷の背割り線を流れるセギと三区分し、特徴づけている<sup>1)</sup>。

さて、松代は真田藩の城下町だったが、江戸時代の町の姿を記した城下町絵図が残されている。それらの絵図の中には堀や川ばかりでなく、道路沿いに流れる水路を記入したものがある。生活を営むのに不可欠の水を供給する重要な水路である。そこで、これらの絵図を通して、松代に残る独特の水路システムの形成とひろがり、特徴を明らかにするとともに、さらに松代藩に残る水道絵図との関係をも明らかにすることが本研究の目的である。

松代において水道絵図を研究した論文はあるが<sup>2)</sup>、城下町絵図に描かれた水路の研究はなく<sup>3)</sup>、また城下町絵図と水道絵図との関係も明らかにしていない。

なお、用語の定義だが、この論文では開渠での水の流れを「水路」とし、水源から下流の川に流れるまでの織りなす水路を総体として捉えるときに「水路システム」とする。江戸時代に書かれた水道絵図には「用水」や「水道」などの言葉が記されているが、「水道絵図」という呼称以外は、「水路」を用いることにする。

## 2. 研究対象とした城下町絵図

城下町絵図は長野県立歴史館や長野市立博物館、松代にある真田宝物館に所蔵されているだけでも、合わせて 10 枚以上ある。その中で、長野県立歴史館では、関川千代丸収集文書の中に、水路システムが描かれた城下町絵図が 2 枚残されていた。「信州松代之図」(年代不詳)と「信陽松城絵図」(1792, 寛政 4)である。長野市立博物館に所蔵されている絵図の中には、水路システムが記載されているものはなかった。真田宝物館には 2 枚残されていた。「松代之図」(1704-1715, 宝永正徳年間)と「御家中屋敷絵図」(年代不詳)である。これら 4 枚を本研究の対象とする。

## 3. 研究の方法

以上の 4 枚に描かれた水路システムを詳細に検討していく。水路システムや市街地の広がりから、「松代之図」、「信州松代之図」、「信陽松城絵図」と「御家中屋敷絵図」の順で描かれたと考えられるので、この順で、4 枚に描かれた水路を江戸末期の嘉永年間(1848-53)に描かれた『侍屋敷之図』に落として比較できるようにした。図が見やすいように人名などを廃し、地名や寺名を加えている。こうして、絵図に描かれている水路システムの広がり、取水源、水路の区分を検討していく。

なお、水路の区分は東京大学の西村の分類を基本とし、道を流れるカワ、屋敷から屋敷へと流れる泉水路、屋敷の裏側の境界線である背割り線を流れるセギとして区分することにする。屋敷から屋敷へと流れていく水路が基本だが、水路すべてを分類の対象にするため、一軒の屋敷や寺だけでも水路を流れている場所により分類した。

また、町内を流れるうるし川と小鮎川は「堀状の小川」として別に分類した。また、屋敷がない町の外部の水路は「町外の水路」として分けて示している。

その後で、水道絵図との関係を考察していきたい。

\*信州大学農学部



写真-1 「松代之図」

#### 4. 城下町絵図の分析

##### (1)「松代之図」

名高い絵図であり、色彩豊かで豪華な絵図である。絵師だった三村自閑斎により、宝永正徳の頃（1704-15）に描かれたといわれている。この絵図の大きな特徴は町を立体的に描く鳥瞰図であることである。千曲川の上空から松代を見る方向で町を描いている（写真1）。

絵の構図だが、北から南の方を見ている。下には千曲川が右から左に流れ、上にはのろし山、中央には城下町が描かれている。鳥瞰図ゆえに、そこには松代城の大手門、武家屋敷の建物、門、塀、庭木、町家の建物、寺社の建物や門と鳥居などが、詳細に、美しく描かれている。しかも町中を流れる細い水路や水路をわたる小さな橋まで、詳しく記入されている。街全体がこと細かに描き込まれた絵図といえよう。

松代は北に千曲川が流れており、南に行くほど標高が高い。水はゆえに南に広がる武家町から北の町人町、武家町、寺社、城の方へと流れていく。

この絵図に描かれた水路を江戸末期の地図に落としたのが図1である。城下町南部の武家町にある南北の道は、西から有楽町、竹山町、代官町、馬場町、表柴町、裏柴町と並んでいるが、いずれも道にカワが流れている。

城に近い殿町だが、武家屋敷を囲む白壁の前に水路が描かれている。この水路は、城の門から南側に広がる殿町の区域では、道の両側に描かれているようである。しかし、大手門の位置から北側の区域では、白壁の下に水路は描かれていない。

次に、大英寺の南側に池が描かれている。湧水池として知られていた池である。水路が池から大英寺の門付近まで下っているが、その先は描かれていない。

町人町だが、八町ある。いずれも道の中央を水路が流れている。

城下町の東部に広がる武家屋敷と寺社がある町だが、やはり道には水路が描かれている。ただ、中田町が、部分的にしか見えないのだが、道路の両側を水路が流れていることがわかる。その他の道は残念ながら確認できない。

この「松代之図」に描かれている水路の特徴だが、まず、詳細さがあげられる。水路が道のどこを流れているのかわかるばかりでなく、水路にかけられている渡り板のようなものまで描き込まれているほどである。

しかし、町全体を巡る水路システムの視点から捉えると、不明な点が多い。鳥瞰図ゆえに、建物や塀、高木の裏側が描かれていないこと、また地名や寺の名を書いた付箋を付けているのでその部分が覆い隠されてしまっていることから、わからない所がある。

さらに、ところどころ霞でおおわれたように描かれているので、町全体の広がりもわからない。しかし、描かれている範囲では、どの道にも水路が描かれている。

取水源は大英寺にある池が描かれているだけである。しかし、取水源とは示されていない。神田川は部分的に描かれているが、水路の水源となっているような表現はない。

描かれている水路はほとんどがカワである。よってこの図から、この時には松代の町全体にカワが巡るシステムがすでに形成されていたと推測できる。

##### (2)「信州松代之図」

この絵図は、城下町の広がりから考えると、「松代之図」（1704-15、宝永正徳年間）と「信陽松城絵図」（1792、寛政四年）の間に描かれたと推測される。この絵図には地図風に城から城下町まで町全体が描かれている。絵図のすみに「御城」と書かれ、城の位置が示されているが、大手門が書かれているだけであり、他のものは描かれていない。そして城下町の道と川がくっきりと書かれている。武家屋敷に住んでいる人の名前がその屋敷の場所に記されているが、敷地割りの線はない。町人町では、名前が書かれている場合はまれである。

この絵図の特徴だが、城に近い武家町である殿町や清洲町では道路が赤く塗られ、何人かの名前も同様に赤く塗られている。理由は不明である。また、朱色と思われるが、色の種類ははっきりとは識別できない線が、城下町の道路に引かれている。凡例はこの絵図には示されていないが、川と同じ色であることから、水路を表現していると考えられる。

「信州松代之図」は地図ゆえに水路システムがわかる。それを示したのが図2である。しかし、道を流れる水路は常に道の中央に書かれており、路上のどこを走っていたのか、区別されてはいない。また、武家の名前だけが書かれており、屋敷の区画がかかれていないため、町の広がりわかりにくい。しかし、おおよそのところを図では点線で示している。

西から見ていくと、まず有楽町だが、神田川沿いから水路が始まっている。神田川から取水したか湧水があったのだろう。北に向かい流れていく。

竹山町を流れる水路も神田川沿いから始まる。北にまっすぐに向かい、街道の手前で、有楽町に向かう水路が西へ分岐する。この東西の水路は有楽町と竹山町から水を集めている。水路はさらにまっすぐ下り、街道を越えていく。そして北へと城の方に流れていく。

代官町の水路は乾徳寺近辺から始まる。代官町を北へ下り、町人町である紺屋町に達すると、東西にのびる道の中心を流れる水路に合流している。

馬場町の水路は南にある堤池から始まる。そこから同心町、そして馬場町をまっすぐ下り、木町で街道を過ぎて西に向かい、殿町の南側を西へと向かう。竹山町からの水路と合流し、北へと城の方に向かう。「松代之図」では小川のように描かれているうるし川である。

城の周囲の殿町と清須町だが、道が赤く塗られているので、水路は全くわからない。

表柴町と裏柴町の水路の源だが、表柴町は南の方から始まっている。裏柴町は南の端にある方形の池から始まる。現在も残されている湧水池であろう。双方とも北に流れ、大英寺の南で合流する。そして街道をわたって北へ向かう小鮎川になるが、「松代之図」と同じである。

大英寺の南東には堤と方形の区画の中に書かれている。場所から判断すると現在のつつみ公園の池と思われる。「松代之図」には描かれていない。水路は北へと向かう。寺町から伊勢町などの南北にのびる町人町を北へ流れていくのは「松代之図」と同じで

ある。

東部の武家町だが、一番東に位置する水路がある。水源から北に下り、西に折れたあと、長国寺の前を北に流れていく。その先で梅翁院に入るが、そのあとは不明である。絵図がこの部分だけ黒ずんでいるので、読みとれなかった。この水路は、「松代之図」には長国寺の前しか描かれていない。

以上がこの絵図に描かれた水路だが、特徴は以下の道である。まず、水路システムの広がりだが、町全体に水路が書かれているわけではない。殿町と清須町では道路が赤く塗られ、水路が読みとれない。そして東の田町付近の武家町と南の端にあたる裏同心町などでも、水路が書かれていない。殿町と清須町は何らかの事情で読みとれなくされたのかもしれない。田町は前図の「松代之図」では水路が書かれていた。東の地区の水路がまとまって抜けていることになる。裏同心町は前図では書かれていない。新しく宅地化されたことにより水路はまだ建設されていなかったのかもしれない。

水源だが、神田川から取水しているか湧水か不明なところが2カ所、6カ所が湧水と考えられる場所、東南の村から1本水路が引かれている。この図で、初めて取水源と町中の水路が明確になった。なお、大英寺の湧水池は描かれていない。

水路の区分だが、武家屋敷の敷地割りの線が書かれていないので、泉水路とセギの区別はできない。図に描かれているのは、ほぼカワである。

### (3)「信陽松城絵図」

この絵図は1792年(寛政4)に描かれたもので、城下町全体がきれいに着色された地図である(写真2)。町は塗り分けられており、凡例がある。武家屋敷は一軒ずつ敷地割りの線が引かれ、武士の名前が書かれているほか、桃色に着色されている。寺社は赤くぬられ、やはり名が書かれている。町人町はその範囲が緑色に塗られているだけである。その他、道が黄色に、川や水路が青く塗られている。

水路だが、「信州松代之図」に比べるとさらに詳しく書かれている。「松代之図」同様に、水路が道の中央を流れるか、あるいは端を流れるかという点も書き分けられている。それを表したのが図3である(縮尺の関係で、書き分けられなかった)。

城下町南部の武家町だが、「信州松代之図」と異なっているのは、有楽町、竹山町、代官町、馬場町、表柴町、裏柴町で取水源が増えている。さらに離れたところに取水源を求め、水路が伸びている。町が拡大したり、水の需要が増えたりしたのだろう。

殿町だが、小川以外の水路は描かれていない。他の町では詳細

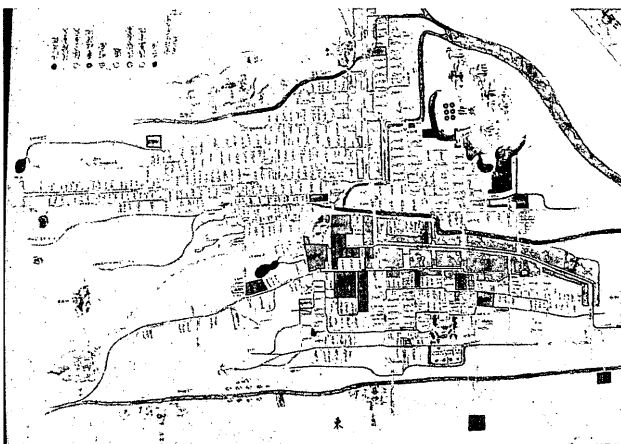


写真-2 「信陽松城絵図」

に書かれているのに、この町だけ書かれていないのは不自然であり、意図的ではないかと考えられる。

同心町の東にある裏同心町では水路が一軒の武家屋敷から始まっている。湧き水があったのだろう。道の西側を北流している「松代之図」や「信州松代之図」には書かれていない新たな水路である。その突き当たりで、今度は表柴町と馬場町の屋敷の間の背割り線を水路が北流する。この水路ははっきりと描かれている。現在のセギと呼ばれている水路の位置になる。

大英寺のすぐ南には池が2カ所描かれ、さらに南からくる水路が2カ所の池を結び、そして大英寺に入っていく。この2カ所の池は大英寺にある湧水池であろう。「信州松代之図」には書かれていない。ただ、「松代之図」には大英寺の南に池が描かれ、門まで水路が見える。これと重なるのだろう。

現在のつつみ公園からは水が2本の水路に分かれて流れていく。「信州松代之図」では水路が1本しか書かれていないが、それはこの図で西側の水路にあたる。

さらに東では、「信州松代之図」において水路が書かれていない地区に水路が示されている。すなわち、松山町から下田町にかけての地区の水路が描かれている。松山町付近で6ヶ所の湧水から取水した水はいくつかの水路に分かれながら、北へと流れていく。

町人町の水路は変わっていない。

この美しく彩色された「信陽松城絵図」の特徴は、道のどこを水路が流れているか、詳細に書き込まれていることである。

町の範囲は南に拡大されている。そして水路システムの広がり、東部にある松山町から下田町にかけてや南部の武家町に水路が描かれており、町全体に巡らされていたことがはっきりとわかる。ただ、殿町には水路が描かれていない。

取水源だが、神田川から取水しているのが4カ所、湧水と推測されるのが19カ所、東南の村で関屋川から取水して水路を引いているのが1カ所である。湧水の数が飛躍的に増えている。そしてその場所は特に南西の方に多い。

描かれている水路はほとんどがカワであるが、1本だけはっきりと長いセギが示されている。また、特に東部では水路が複雑で、屋敷の裏側を通る短いセギが多く見られる。以前の図にはなかったことである。

### (4)「御家中屋敷絵図」

この絵図は成立年代が不明である。ただ、城下町の屋敷の範囲が「信陽松城絵図」と同じことや、武家屋敷に住んでいる武家の名字がかなり同一であることから、「信陽松城絵図」と同じ頃の年代に作成されたと考えられる。

この絵図も鮮やかに着色された地図である。凡例もあるが、「信陽松城絵図」とは色が異なっている。武家地と町人町の色が逆なのである。城は堀の一部と大手門、そして「三之丸」という文字、木立が書かれているにすぎない。

町の範囲も水路システムも「信陽松城絵図」ときわめてよく似ている。

取水源の数もおなじである。神田川からは4カ所、湧水と考えられるが19カ所、東南の村で関屋川から取水し引いてきているのが1カ所である。場所もほぼ同様ではないかと考えられる。

水路の区分だが、やはりほとんどがカワである。「信陽松城絵図」と比べると、南北の長い道を結ぶ東西の道に水路がやや増えている。ただ、長いセギは2本書かれている。馬場町と表柴町間のセギ以外に、代官町と馬場町間のセギも部分的ながら、明瞭に描かれている。

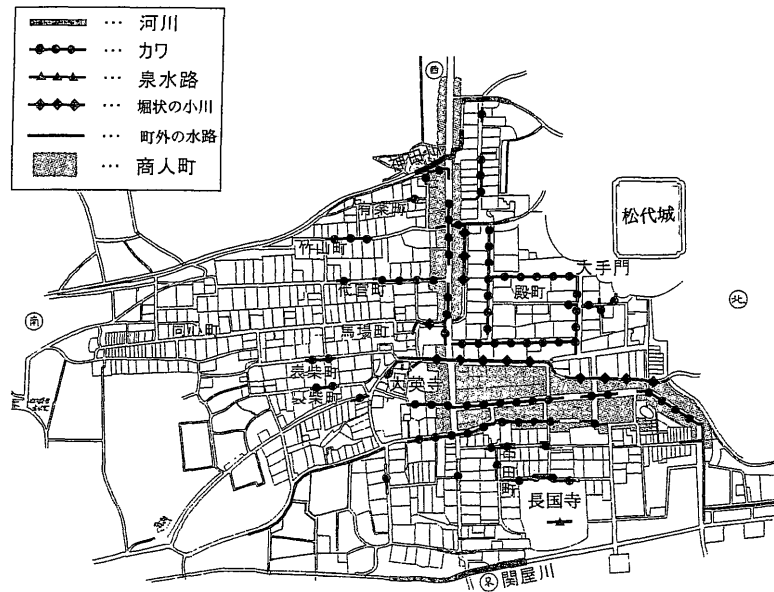


図-1 「松代之図」に描かれている水路

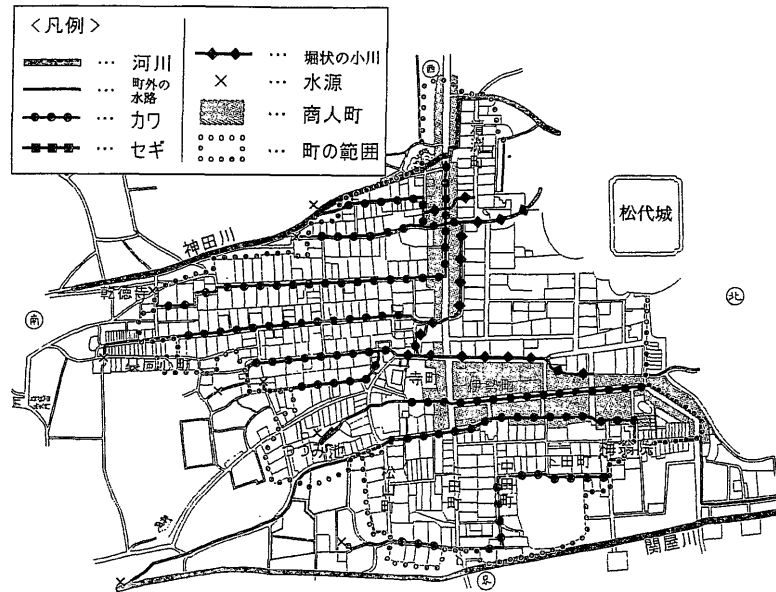


図-2 「信州松代之図」に描かれている水路

5. 城下町絵図に見られる水路システムの特徴

これら4枚の絵図に描かれた水路の様子から、次のことが明らかとなった。

まず、水路システムの形成過程だが、4枚の中で最も古い「松代之図」では、描かれているほとんどの道に水路も描かれていた。カワである。「松代之図」が描かれた1705年から15年には、おそらく町中にすでに水路が巡っていたと推測される。よって、形成されたのはそれ以前であり、形成過程は残念ながら絵図からはわからなかった。

次に水路システムの広がりを見るなら、「信州松代之図」と「信陽松城絵図」「御家中屋敷絵図」とを比べると、町が広がって

いる。城下町の広がりにあわせて水路も広がるかのようなのである。「信州松代之図」において南の裏同心町に水路がみられないのは、新しい住宅地だったと考えられる。

取水源だが、町の広がりにあわせるかのように飛躍的に増加する。「信州松代之図」では合わせて9カ所あるのに対し、その後の絵図では合わせて24カ所になっている。そして増加した場所は湧水が中心であろう。町の東南に多い。

水路をカワ、泉水路、セギと3区分する視点から見ると、4枚に書かれている水路は、カワが多い。泉水路に分類されるのは長国寺の境内に描かれている水路だけである。長いセギだが、「信陽松城絵図」に表柴町と馬場町の間を流れるセギが描かれている。

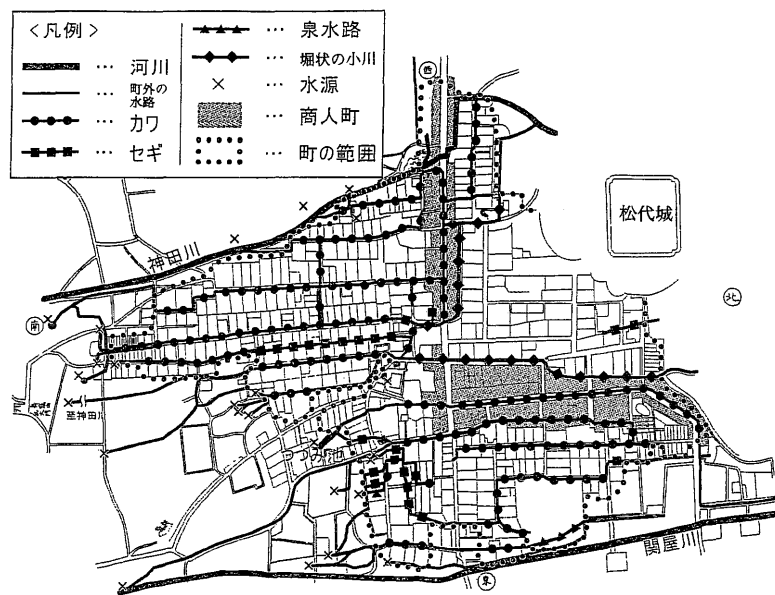


図-3 「信陽松城絵図」に描かれている水路

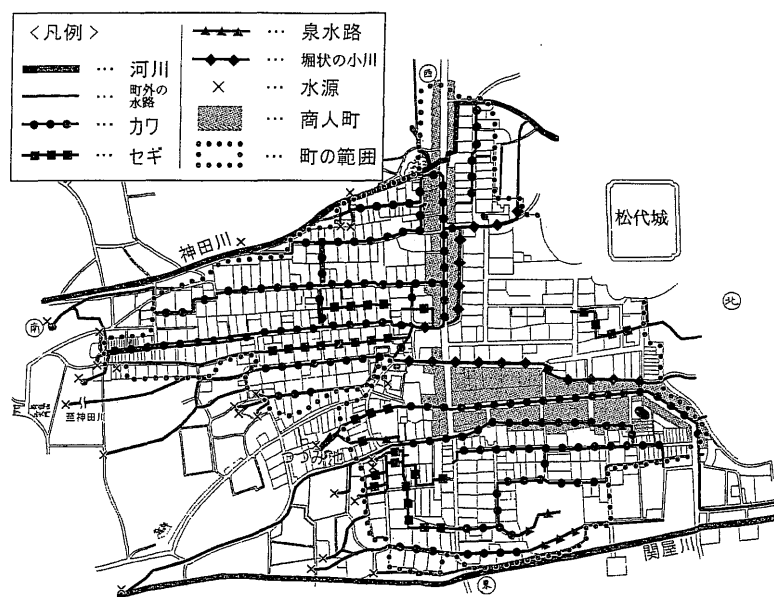


図-4 「御家中屋敷絵図」に描かれている水路

「御家中屋敷絵図」にはさらに馬場町と代官町の間に流れるセギが描かれている。「信陽松城絵図」が描かれた1792年以前にこのようなセギと呼ばれる水路が形成され始めたのではないかと考えられる。

城下町絵図は、18世紀の城下町の拡大とそれに応じた水路システムの拡大および取水源の増加を示している。セギが図に示され始めるのもこの時期である。セギと呼ばれる水路は城下町の拡大に伴い、水路が増加していくときに造られたのではないかと推察することができる。泉水路は城下町絵図には広い長国寺の境内だけにしか描かれていない。屋敷の内側を流れるという特性のた

めかもしれない。

ところで、これらの絵図を見ると、「松代之図」以外では殿町の水路が描かれていない。理由は不明だが、全く別個に扱われている可能性がある。城下町東部にある武家町でも「信州松代之図」では水路が描かれていない。意図的な可能性があるが、今のところ、判断できない。

#### 6. 水道絵図に見られる水路の特徴

国文学研究資料館に残されている松代の水路を示した水道絵図を一覧表にしたのが表1である。全部で31枚ある。それらを、

表-1 真田家文書に残されている水道絵図  
(順番は真田家文書目録に従った)

| 番号     | 絵図名          | 制作年         | 記載範囲  | 水源 | 水路区分      |
|--------|--------------|-------------|-------|----|-----------|
| さ 122  | 清須町水道絵図      |             | 清須町一部 |    | カワ        |
| さ 124  | 清須町水道絵図      |             | 清須町一部 |    | カワ        |
| さ 123  | 武家屋敷地水道絵図    | 明和6 (1769)  | 殿町全域  |    | カワ、セギ、泉水路 |
| さ 126  | 松代城曲輪近辺水道絵図  | 明和7 (1770)  | 殿町一部  |    | セギ        |
| さ 127  | 紺屋町近辺水道絵図    |             | 紺屋町一部 |    | カワ、畑状の小川  |
| さ 125  | 小六院近辺水道絵図    | (寅年)        | 小六院一部 |    | 暗渠        |
| さ 128  | 西木町水道絵図      |             | 木町一部  |    | カワ、暗渠     |
| さ 133  | 長刀堀近辺水道絵図    | 文政10 (1827) | 殿町一部  |    | カワ        |
| さ 130  | 武家屋敷地水道絵図    | 文政11 (1828) | 上田町一部 |    | 泉水路       |
| さ 129  | 長刀堀近辺水道絵図    | 天保4 (1833)  | 殿町一部  |    | 泉水路       |
| さ 131  | 代官町近辺水道絵図    |             | 代官町一部 |    | カワ        |
| さ 132  | 武家屋敷地水道絵図    |             | 殿町一部  |    | カワ        |
| さ 134  | 御馬場近辺水道絵図    |             | 殿町一部  |    | 暗渠        |
| さ 135  | 武家屋敷地水道絵図    |             | 竹山町一部 |    | カワ        |
| さ 1152 | 武家屋敷地水道絵図    | 文政9 (1826)  | 殿町全域  |    | 暗渠        |
| さ 1153 | 古土手敷絵図       |             | 不明    |    | 川         |
| さ 1154 | 清須町水道絵図      |             | 清須町一部 |    | 暗渠        |
| さ 1155 | 臥樋普請箇所絵図     | 文政9 (1826)  | 殿町全域  |    | 泉水路       |
| さ 1156 | 紺屋町近辺水道絵図    |             | 殿町全域  | 有  | 泉水路、暗渠    |
| さ 1157 | 紺屋町近辺水道絵図    | 寛延7 (1750)  | 殿町全域  |    | 暗渠        |
| さ 1158 | 代官町近辺水道絵図    |             | 1)    | 有  | カワ        |
| さ 1159 | 代官町近辺水道絵図    |             | 1)    | 有  | カワ        |
| さ 1160 | 関屋川分水場普請箇所絵図 |             | 木町一部  |    | カワ        |
| さ 1161 | 臥樋普請箇所絵図     | 文政6 (1823)  | 殿町全域  |    | 泉水路、暗渠    |
| さ 1162 | 用水堤通路境界絵図    | 安永8 (1779)  | 不明    |    |           |
| さ 1163 | 水道絵図 (1)     |             | 不明    |    | 川         |
|        | (2)          |             | 紺屋町一部 |    | カワ        |
|        | (3)          |             | 2)    |    | カワ        |
|        | (4)          |             | 3)    |    | カワ        |
|        | (5)          |             | 不明    |    |           |

- 1) 代官町、竹山町、裏町の水路を中心に水源から清須町までの水路が描かれている
- 2) 松山町から十人町までの水路が描かれている
- 3) 田町から長国寺までの水路が描かれている

城下町絵図と同様に、水路システムの広がり、取水源、水路の区分の面から、検討した。

31 枚の水道絵図に描かれている水路システムの広がりだが、城下町全体を示したものはなかった。水路を水源から順に水路を巡らせている地区全域を描いているのが3枚(図の番号:1156, 1158, 1159)、水源を示さずに地区全域を描いているのが7枚(図の番号:123, 1152, 1155, 1157, 1161, 1163(3), 1163(4))、その他は水路の一部分だけが示されている部分図である。このように、部分図が過半数を占め、さらに地区全域の図や、水源から地区全域にわたる図である。描かれた場所は、殿町が多い。11枚ある。

取水源だが、上記の3枚にしか書かれていない。3枚中の1枚は殿町を中心に描かれた図であり、水源は大英寺である。大英寺の池から水路が描かれている。他の2枚にはいずれも代官町、竹山町、有楽町の水路が描かれ、代官町のカワの水源として篠池と乾徳寺、竹山町のカワは神田川からの取水、有楽町のカワは神田川のそばから水路が始まっている。竹山町以外では湧水を利用している。

水路の区分だが、カワが描かれた図が多い。14枚ある。泉水路は6枚に描かれている。そのうち、5枚が殿町の図であり、1

枚の図が上田町である。屋敷の裏を流れるセギは1枚にしか描かれていない。それら以外に、殿町を中心に暗渠が描かれている。上水道として利用された水路と考えられる。

## 7. 城下町絵図と水道絵図との関連性

城下町絵図と水道絵図を比較するならば、次のことが明らかになる。水路システムの広がりだが、城下町絵図は町全体で水路が張り巡らされている状態を水源から下流まで描いているのに対し、水道絵図は町の一面を描く部分図にとどまっている。しかし、より詳細に描かれているのが特徴である。このように城下町絵図で示されている水路システムを水道絵図で補完することができるといえよう。

水道絵図には殿町を中心とした水路が描かれているものが11枚含まれている。3枚の城下町絵図には表されていない。両者を併せて、初めて松代の町全体の水路システムを解明することができる。

水源だが、描かれている場所は同じである。ただ、水道絵図には神田川からの取水などがより具体的に書かれている。

水路の分類だが、水道絵図にはカワ、泉水路、セギ以外に、暗渠がでてくる。地表を流れる水路ではないが、生活を支える重要な水路である。これは城下町絵図には表されていない。

この水路が上水とすると、殿町において道の地表を流れる、つまり道の両側にある水路は飲み水を供給するものではない。他の地区では飲み水にも用いられた可能性が高い水路であった。よって、城下町絵図により明らかになった水路システムは、町全体を捉えて検討を進めるには、水路の三区分をさらに細かく分け、見直す必要があると考えられる。

今回の研究により、水路システムの全体像が把握され、その広がりや取水源の増加が明らかになったが、一方で、水道絵図には城下町絵図に描かれていない殿町の水路を示す図も含まれ、城下町の水路システムを把握する上で、城下町絵図を補完できるものであることがわかった。また、現在の伝統環境保存区域で示された水路の三区分だが、江戸時代の町全体を視野に入れる場合には、再検討する必要性が明らかとなった。

## 補注及び引用文献

- 1) 長野市・長野市教育委員会 (1982): 庭園都市松代: 伝統的建造物群保存対策調査報告書, 長野
- 2) 佐々木邦博・米林由美子・平岡直樹 (2001): 城下町松代(殿町地区)において江戸時代に造られた泉水路の形成過程とその用途: ランドスケープ研究 64(5), 419-422
- 3) 1970年に長野県教育委員会がまとめた『松代の民家』などから城下町絵図が取り上げられているが、水路への言及は少ない。
- 4) 長野県教育委員会 (1970): 松代の民家: 長野県民俗資料調査報告 10, 長野